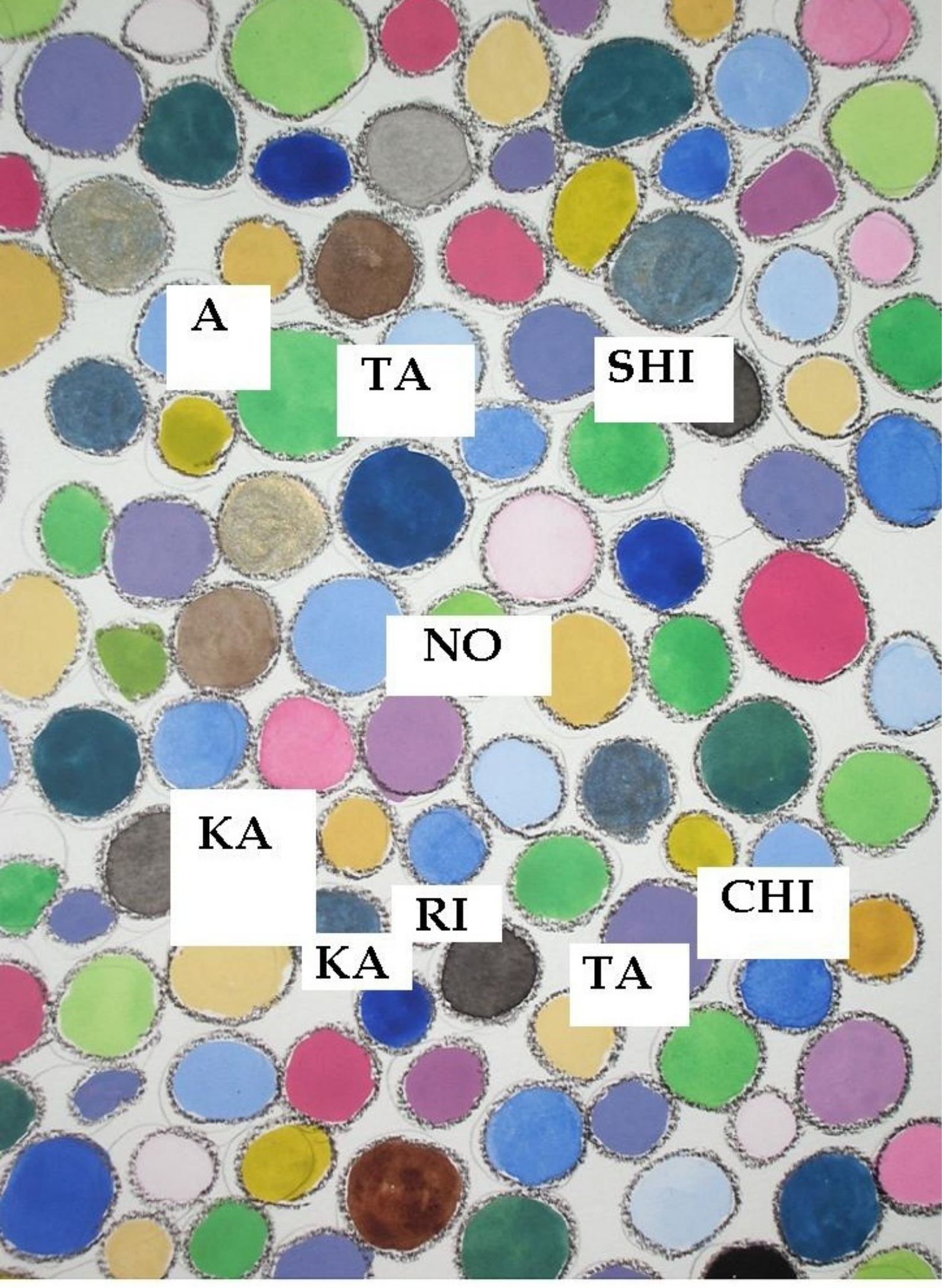
A
TA
SHI
NO
KA
RI
KA
CHI
TA

○野原真由美の住む１Ｋアパートの玄関先。
　　真由美、男と対面している。
　　男、荷物を多めに持っている。
真由美「なんで、なに？どうして？」
番「びっくりした？」
真由美「う、うんだいぶね。…元気そうだね、急にどうしたの？」
番「なんかさ、急にマユのこと気になって。まだここに住んでっかなーってポスト見たら、野原だったからさ。あ、いるんだと思ってピンポン押しちゃった。ダメだった？」
真由美「ごめん、今ちょっと忙しいんだ、あたし。これから仕事だし、また今度ゆっくりお茶でもしよう。じゃあ」
　　真由美、玄関のドアを閉め寝室へ行く。ベッドに腰かけ、乾きかけの髪の毛をタオルでもむ。玄関の方から物音がしたのち、新聞受けから紙が滑り込む。やぶったノートである。番だ。
真由美「くそう、帰ってなかったのかよ」
　　真由美が手にした紙には、『分かった。待ってる』と書かれている。
　　真由美はその紙を持ったまま、そっとのぞき穴から番の姿を探す。
　　真由美は下の方に塊があるのを確認する。
真由美（心の声）「錦谷田番のかたまり。おいおい、待ってるってなんだよ、なんか話でもあるのかな。ほんっと何でまた現れた？まさかまた番とやり直すのか？ええ？まじで？いやありえんでしょう、今さら」
係１「今さら？」
　　真由美の耳に声が届く。部屋の中に誰かいないか見る真由美。
係１「探しても姿はない」
真由美（心の声）「え？誰？」
係１「かかりだ」
真由美「か、か、り？」
係１「番くんとずーっと一緒にいられますように、係」

真由美「は？」
　　真由美、自分の頭の中で反復する。
真由美「あ」
真由美（心の声）「あれから何年たってるんだろう…二十四、五歳だったよなあたしまだ。ってことは」
係１「苦節六年」
真由美「六年か。で、あんた誰？」
係１「か、か、り！」
真由美「意味分かんないし、今さらジローラモだし」
係１「好きに呼べ！」
真由美「は？」
係１「叶うだけありがたいと思え野原真由美」
真由美「あたしおかしくなった？」
係１「喜ばないのか？」
真由美「うわ、まじでなんなの。もう！」
　　インターホンが鳴る。
　　番がドアをノックする。
番「マユ、大丈夫？怒ってるの？」
　　真由美、玄関のドアを開ける。
番「酔ってる？」
真由美「酔ってないよ。ごめん今は話せない」
真由美（心の声）「ちょっと、係の人、あたしこの人、ね、あたしの目の前にいる錦谷田番ね、この人。この人とはもう、とっくに終わってんの。そんな昔の願いごと今になって叶えられても困る！」
係１「身勝手だねー。わっしの存在価値はどうなるんだよ」
番「ねえ、マユちゃん。誰と話、してんの？」
真由美「え？…あたしさあ、頭おかしくなりそうだからさ、言っていいかな？」
番「ああ、言ってみなよ、言っちゃいな。あがっていい？」
真由美「あん、いいよ。…とりあえず適当に座って」
　　番、自分から一番近いイスに座る。
　　真由美、もう一つの方のイスに座る。真由美、体の一部をぎゅっと掴んでいる。

真由美「番はさ、今彼女いる？」
番「おお。いきなりな質問だねえ。彼女？…は、いない」
係１「ほら、チャーンス、いけ、真由美、いけー」
真由美「あー、もう、うるさい係、ちょっと黙ってて」
番「かかり？」
真由美「そう。なんかさあ、係が今さら来た。おせーっつうの」
番「（小声で）取りたて屋とか？…いるの？」
真由美「ちがうから」
係１「結構大変だったんだよ、錦谷田番をここまで連れて来るの」
　　番、何かに納得した様子で頷く。
真由美「だから余計なお世話なんだよ」
番「あのさマユ、オレがその係の人と話って出来ないの？」
係１「ざーんねーん。わっしは聞こえるけど錦谷田番にわっしの声は聞こえないんだね」
　　真由美、係が言った通りに番に伝える。
真由美「言っとくけど、番、泊めないかんね」
番「ああ、いいよ」
真由美「‥今家ないの？」
番「いや、あるけど女の子の家ってなんか泊まりたくなるんだよね」
真由美「オプションが大事なんでしょどうせ」
番「マユちゃん最近セックスしてないでしょう？なんか荒んでるよ」
真由美「はー、相変わらずだね番。やばい。あたしさ、そろそろ出ないと罰金だから出かけるね」
番「うん」
真由美「着替えたいんですけど…」
番「あ、ごめん。トイレ貸して。いいよーって言ったらでるよ」

○真由美の勤務先、クラブシンフォニー。

店内の客席に真由美を含めて５人の女性が待機している。それぞれに携帯電話を操作したり、名刺の用意をしたりしている。

真由美（心の声）「本当、係なんていんのかよ。他の願いごとの係もいるってのか。だったらなんで今あたしこんなんなんだよもう。番はアリ？いやナシでしょう。ああー、今日帰ってまだいたら、やっちゃうんだろうなー」

客席の酔客「やっちゃえやっちゃえー」

真由美「（小声で）おまえも係か」

店のボーイ「リサさん、お願いします」

リサ（真由美）「はーい」

リサ（真由美）、席を立ち客が待つ席へ向かう。女性が席を立ち代わりに客の向かいに座るリサ。

店のボーイ「リサさんです」

リサ「リサでーす、おじゃましますぅ。はじめまして、ご一緒にいただきまーす」

客１「どうぞどうぞ。あ、あなたリサさん。お顔をもう一回見せて」

リサ「え？」

客１「ああやっぱりね。子供がいるね」

リサ「やだあ、いませんよ。もうやめてくださいよ」

客１「私ねえ、霊感強いんですよ。水子かな？」

リサ「いませんって」

客１「おかしいなあ。ちょっと手、見せて」

リサ少し面倒臭そうに手を出す。

リサ「私手相って良いこと言われたことなくってなんか抵抗あるんですよ」

客１、リサの手を触り、見ている。

客１「あらあら。やましいことがいっぱいありますね。ギャンブルも随分やるし。お金もあちらもルーズなのかな？」

リサ引きつった笑顔で客１の顔を見る。

リサ「いーやーあん。わかっちゃいますう？」

客１「いいよね、お金もらって、酒飲んで、占ってもらってさあ。うらやましいよ」

リサ、客１と自分の水割を作る。

リサ「すみませーん。幸せ者でーす。今日は飲んじゃっていいですか？」

客１「いいよ。そのボトルだったらいくらでもどうぞ。リサちゃん、アドレス教えてよ。休みの日にさ、ゆっくりごはんでも食べに行こうよ」

リサ「いいですよ。行きましょ行きましょー」

〇クラブシンフォニー（閉店時間）
客２「ほら、リサちゃん帰るよ」
　　リサ、ふらつく足取りでロッカールームへ向かい着替る。
　　店の外で客２が待っている。
〇クラブシンフォニー１階エントランス。
真由美「ありがとうございました。私今日はまっすぐ帰ります」
客２「大丈夫？送って行くよ」
真由美「いえ、大丈夫です。ありがとうございます」
客２「遠慮しないで、方向一緒だし」
真由美「…はぁ、でもですね、」
　　通行人、怪訝な顔で真由美を見て通り過ぎる。
　　客２の姿は、はじめからない。
係１「お客なら帰ったよ。送っていくのはわっしだ、よーん」
真由美「くそ、てめえー」
　　真由美、空を殴りながら歩く。
　　水を買い、がぶがぶ飲む。
係１「よしよし。帰るよ」
　　真由美、タクシーに乗る。

〇真由美のアパート

真由美、玄関の鍵を開ける。

真由美「なんだよ、番帰ったんか」

部屋の明かりをつける。

テーブルの上に書置きがあるのを見つけ、音読する。

真由美「仕事になっちった。またね、マユちゃん。なんだよもう」

真由美、書置きの裏を見る。

分かった、待ってる。と書いてある。紙をぐちゃぐちゃに丸めてゴミ箱に力いっぱい投げつける。

真由美、シャワーを浴びに行く。

真由美「係、あんた付き合いなさいよ、飲み直すんだから」

係１「酔ったら、わっしとはしゃべれなくなるよ」

真由美、酒をしまい、お湯を沸かす。

真由美「あたしってさあ、さみしい女だねほんっと。どうしたいんだかさっぱりわからないよ」

係１「錦谷田番とずーっと一緒でいいじゃないか」

真由美「だからね、それはやっぱり無理なんだよ。あたしのさみしさを受け止められないよ、あいつは。たぶんあたしより何百倍もさみしい思いして生きてきたからね、そうとは言わないけど。どっかでさ、お前はオレよりは随分ましだよって思ってんだよ。」

係１「でもね、わっしはどうにもできないよ」

真由美「なんとかなんないの？他の係とチェンジとかさ。あたし考えてみたらさ、結構な数の願いごとしてんだよね。神頼みしまくり。ま、もう叶ったのもあるし、叶ったおかげでえらい目にあったこともあったんだけど。そん時は全くそうとは思わなかったんだけど、さっき気づいた」
係１「ふーん」
真由美「係はさ、ほんと興味ないんだ、あたしと番のこと以外」
係１「だって係だから」
真由美「番にさ、どんなことしたの？あたしんとこに連れて来させるまでに」
係１「んー。いろいろ。思い出させ作戦とか、偶然を利用して刷り込むだとかね」
真由美「へえー。ねえ、係から見てどう？番は？係ってこと抜きにして、人として」
係２「あいつはさいってーだ。井口直之は円満離婚したよ」
真由美「え？」
係１「なんだそのいぐっちなおゆきって奴は」
係２「よかったじゃないか、野原真由美」
真由美「…ちょっと待って、係、二人いるもしかして」
係１「わっしは一だぞ」
真由美「もう一人、いる、よね？」
係２「わていのことかい？」
真由美「そうそう、あんた。あんた誰よ？」
係２「わていは、あ、今電話なるよ」
真由美「え？」
　　真由美、テーブルの上に置いていた携帯電話を手に取る。
真由美「うわ！」
　　井口直之からのメール。
真由美「係！もう、なにやってくれるんだよ！」
係１「わっし？」
係２「わていか？」
真由美「ややこしいなもう。わてい、あんただよ」
係２「なんて？」
真由美「要するに、近々会わないかって。あたし別れますようになんて言ったっけ？」
係２「言ったさあ。円満ってね。そんでちゃんと付き合えますようにって」
真由美「覚えてないんだよね、まじで」
係２「だいぶ酔ってたからのう。でもま、願い事に違いない」
真由美「あー、えー？っていうか直ちゃん、離婚？本当？あたしのせい？そうとはメールには書いてなかったけど」
係２「うーん。わていは知らんよ。まもなくお役御免だしね」

真由美「はぁ。どうしよう。あたしどうしたいんだろう分かんないよう」
係３「結婚してない人なら誰でもいいんじゃないのかしら？」
係４「いんや、強烈に好きな人ができてその人も野原真由美を好き、これだっぴ」
係１「なあに後から来て図々しい。錦谷田番とずーっと一緒にいられることだもんね」
係２「井口直之は円満離婚したんあんよ」
係５「平凡でもいいから野原真由美を愛してくれる人しかいないっすよ」
真由美「ちょっとお、あんたたち勝手なこと言わないでよ。なんかすげー増えてるし」
係３「じゃあ、わとくしから自己紹介をばさせて頂きますわ。わとくしは、野原真由美２７歳が井口直之と関和文の計二名と交際中に願われたのです」
真由美「つぎ」
係１「えー、わっしは」
真由美「あんたはもういい」
係４「わんは、去年願われたっぴ。全く、３人も付き合ってるのにねえ、強烈に好きな人ができてってもうねぇ」
真由美「つぎ」
係２「わていは円満離婚。だけど、関和文は願わなかったのかい？」
真由美「つぎ」
係５「八橋伊佐夫のことかなと思ったすけど、平凡でもいいからの人」
真由美「あんたは、がんもでいいや。八橋さんのこと思い出そうとするとなんか知らないけど、おでんが邪魔するんだよね」
　　真由美、突然横になり気を失う。

係３（わとくし）「わとくし、思うんですけど結婚していない人というのが願いだったわけですから、錦谷田番でいいんじゃないかと思うんです」
係４（わん）「しかしだよ、わんが思うに錦谷田番では強烈に好きで好かれる人に当てはまらんのだっぴ」
係２（わてい）「じゃあ井口直之はどうかいね？いまや結婚していない人なわけやし」
係５（がんも）「わっすは、八橋伊佐夫みたいな平凡だけど平和な男が結婚もしていないしいいんじゃないかと思うすよ」
係１（わっし）「そいじゃあ、とっひょしてみようじゃない」
◆字幕
開票速報
錦谷田番(にしきたにだばん)　　２票
井口直之(いぐちなおゆき)　　２票
八橋伊佐夫(やつはしいさお)　　１票
係１「ってなわけでわっすさん、あんた２人のうちどっちかだったらどっちなの？」
係５「うーん。わっすは、２人とも違うすね。だってだって考えてごらんよ、錦谷田番も井口直之も平和な感じとは程遠くはないっすか？」
係３「確かにそうねぇ、わとくし、やっぱり変えますわ、誰か他にいないかしら…。まあ関和文が結婚していなかったらいい線いってると思いますのわとくし、でもねぇ」
係５「わっすは探す。これから探しに行くっす」
係４「わんも探す。これから探してくるっぴ」
　　真由美、起床。
真由美「ねえ、係たちうるさい。もう、みんなキャンセル。どれも今は願ってないからさ」

係１「本当か？よーっく自分の下腹に聞いてみなー」
真由美「胸、ね」
係１「てことは、錦谷田番とはずっと一緒じゃなくて」
係２「井口直之、円満離婚しないからきちんと付き合えない」
係３「結婚している人ってことですの？」
係４「それでもって、強烈に好きじゃない人で、非凡で真由美を愛さない人ということかあ…」
係３「なんだか、悲惨だわ」
係２「野原真由美はマゾヒストか？」
係３「しあわせそうではないわよね」
係１「というか現状維持するだけだよーん」
真由美「ちっ！」
係１「じゃあ、野原真由美は、」
係２「どう」
係３「したいの？」
真由美「……」
係１「今の願いごとは？」
真由美「え？今？」
係２「そう」
係３「い」
係４「ま」
真由美「ピアノ弾きたい」
係５「それから？」
真由美「彼欲しい」
係３「ピアノは弾くとして、彼はどんな彼がいいの？」
真由美「わかんない」
係１「あっそうなの」
真由美「でも、番でも、直ちゃんでも関さんでも、あと八橋さんでもないことは分かった。かも
　」
係１「りょー」
係２「かーい」
係３「あら、いなくなったのね」
真由美「え？二人いなくなったの？やった。で、あたしどうすりゃいいの？」
係３「そうねえ。まずはピアノ弾きにいきましょう」
真由美「どこに？」
係３「どこでもいいのよ、それは。でもなるべく早くね」

〇総合楽器店

　　グランドピアノの値段を見る真由美。

真由美「はあ…。売らなきゃよかった」

　　店内を歩き試し弾きできるピアノを探す。

　　真由美、不協和音が特徴的な曲を弾き始める。弾いていくうちにどんどん集中していって、ギャラリーがいるなと気付きつつも真由美は演奏を続ける。

係５「どすか、この人は？」

係４「ん？」

男「いやー、素晴らしい」

　　真由美の後方で男が拍手をしながら立っている。

真由美「どうも」

　　男、スーツに黒のリュック姿。

係５「平凡だけど、真由美を愛する平和な男っすよ」

　　真由美、すぐに立ち去らずにこにこして立っているこの男をもう一度見る。

真由美「無理」

　　すっくと立ち上がりその場から離れる真由美。

　　楽譜を見て回る。

係３「ねえねえ、わとくしとわんさんだけになったじゃない。わんさん、見つかったのお目当ての人は？」

係４「んー。ちょっと時間がかかりそうだっぴ」

〇カフェ
真由美、携帯電話に電話がかかってくる。
番「おお、マユちゃん。出た」
真由美「何？」
番「あのさ、本題から入るよ。今知り合いの店でピアノ弾いてくれる人探してんだけどマユちゃんやらないかなーと思ってさ」
真由美「やる」
番「おー、まじで？断られるかと思った。そんじゃあさ、早速なんだけど今日とか店寄れる」
真由美「うん、いいよ。ありがとう。メールで詳細入れてくれる？」
番「ＯＫ。すぐその知り合いに連絡しとくよ」
　　真由美、電話を切ると、小さく拳を突き上げる。
〇真由美の実家近くにある神社（元旦）
　　両親、妹と共に初詣に来ている真由美。
　　真由美の順番が回って来る。
真由美「やばい。なんか浮かんじゃったよ願い事。でも何だったか思い出せないよー」
真由美妹「何言ってんの真由ちゃん」
真由美「うん、ちょっとね。（以下心の声）係が来てから分かるってこと？」
係３「そう、」
係４「だっぴ！」